

平成20年度 三重県教育改革推進会議

第4回 学校経営改善部会【議事録兼概要】

I 日時 平成20年5月26日（月） 14:00～16:30

II 場所 三重県総合教育センター 第4講義室

III 出席者 【委員】伊藤 博和、中村 真子、山北 哲、市川 知恵子、大森 達也、伊東 直人
【事務局】鎌田 敏明、真伏 利典、土性 孝充、早川 巖、中谷 文弘、
上田 克彦、山田 正廣、林 康子、北原 まり子、安田 政与志
以上16名敬称略

IV 内容

1 委員紹介・・・中谷室長から紹介

2 報告

(1)第3回学校経営改善部会における意見抜粋・・・資料1に基づき、中谷室長から報告

(2)実践事例報告

鈴鹿市立鼓ヶ浦中学校・・・別冊資料に基づき、佐野公彦校長、西村茂也教諭から報告

《以下質疑応答》

【委員】

Q-U調査とは学校独自に作ったものか。

【佐野】

一般的に市販されているもので、鈴鹿市でも2～3校実施している学校がある。

【委員】

学校が行う生徒用の調査か。

【佐野】

その通りである。

【委員】

授業が分かるという生徒アンケートは、9教科全てをトータルで評価しているのか。

【佐野】

そうである。

【委員】

科目ごとの結果は出ないのか。

【佐野】

一般的な授業ということで昨年はアンケートをとったが、今年は教科ごとにアンケートをとろうと考えている。3つの共通項目と、教科別の2項目を合わせ、1教科5項目でアンケートをとり、各教科の指導に生かすことを考えている。

【委員】

目指す学校像に対して、自己評価項目を設定することはとても難しいと思う。網羅的に設定していけば全体像がつかめるが、精選していけば評価結果が目指す学校像に帰っていない。どういう段階を経て評価項目を決めたのか。

評価指標がブレていると、評価結果がいい加減になってしまうが、どのような形で決めていくのか。職員が共通理解したものになっているのか、その指標が良いのか、それを検証できる仕組みになっているのか。

評価結果が次の改善活動につながっていくための手法を教えて欲しい。

授業がよく分かるということは、集団の質の中で個人に帰っていくと思う。多くの子どもたち楽しくてよく分かる授業になるよう、先生方がいかに工夫をするかであると思う。その辺をどこまで食い込んでやっているのか。

生徒の相談に対して、子どもたちの意識と教師の意識にかなりのズレがある。そのギャップに対し、どのように迫るのか。

【佐野】

評価項目は、昨年数値化ということを意識し過ぎて、テストの点数をあげることを評価項目とした。結果としては上がったが、子どもの興味・関心という、気持ちの面では後退している部分があることが分かり、難しさを感じている。評価指標も適切かどうか難しい。外部評価委員の助言を聞き、実現可能な数値を挙げている。ただ全体としての数値なので、個々の生徒の数値とはなっていない。

【委員】

昨年取組をして、先生たちの作業が増えたのではないと思うが、働き方と矛盾することはあるのか。

【佐野】

校長として一番難しいのは、学校経営の方針を立てた後、いかにそれを職員に浸透させ、いかにうまく動かすかである。行事一つを変えることに関しても、職員は保守的でなかなか理解されないが、渋々ながらやってきた方も1年経って良さを感じている。そういうことの積み重ねが、教職員のやりがいを引き出すことにつながると思う。まずはやってみる、そういうスタンスが大事ではないかと思っている。

【西村】

学校の中でかなり組織化され、それぞれの組織で評価を受け、それを月に2～3度持ち寄って全体として検討している。全ての評価や改善に係わるのは大変であるが、それぞれの部署で担当して改善していくシステムがあるので、できている。

一人ひとりの「授業が楽しい、分かる」を見る工夫として、今年度から週2回、10分間授業参観をしている。一人の視点生徒の様子や手だての変容を見ながら、その子のやる気や楽しさをどう伸ばしていけるか、カルテを作ってやっていきたいと考えている。

【委員】

資料3ページに「ボトムアップ体制」とあるが、どういうことをいうのか。

資料4ページの地域関係者アンケートの項目に「学校生活は楽しい」とか「授業が楽しい」とあるが、どのように評価したのか。

資料5ページ「授業が楽しい」「授業の内容がわかる」という項目が、18年度、19年度とかなりアップしているが、具体的な手だてがあったのか教えて欲しい。

同じ5ページのCRT学力検査は、年度によってかなり違うが、学年を決めて調査しているのか。

同じ5ページの少人数教育について、「少人数学級2・3年生」とあるが、全ての教科で少人数学級をしているのか。

目指す学校像が子どもたちにまで浸透しているのはすばらしいと思ったが、目指す学校像がどこまで実現できたかは、学校自己評価書のどこを見たら分かるのか。学校関係者評価の中で、目指す学校像について議論されたのか。

【佐野】

スタートの時は待っていたが、誰からも何も出てこなかったもので、トップダウン的に提案した。反対の考え方の人もいたがとにかくやってみようということになり、いろいろな活動をしてもらった。1年終わってみればやってよかったということから、自分たちからあげていかなければいけないということになった。

地域関係者アンケートは、学校の中に健全育成協力者会議があり、いろいろな立場の人が30名くらい委員としているので、その方たちにお願ひした。

授業が分かるというのは漠然とした聞き方しかしていない。校内研修の中に、授業研究を重点にした取組を始めて3年目になる。少しは改善される部分があったのかと思う。いろいろな要素があると思っている。

学力テストの学年は2年生である。点数は意識していない。子どもたちが少しでも気持ちよく、意欲を持って授業に臨むことができればと思っている。

少人数学級については、2・3年生は全ての教科で本来の学級数より1学級増やして学級編制をしている。鈴鹿市は全ての中学校で、35人以下の少人数学級編制になっている。

自己評価書の中で目指す学校像がどう評価されているかについては、直接質問しているわけではないが、安心して学校に来られる子どもが増えれば良いと思っている。まず学力をしっかりとつけることが必要で、そのために喜んで勉強ができる環境を整えることが必要だと考えている。外部評価の中で具体的なものはないが、子どもたちや保護者の声として「学校に喜んで行っている」ことが少しでも上がってくれば、それにつながってくると思っている。

【部会長】

評価が学校経営や教育活動の改善につながっている、生徒の満足度も上がっている、目指す学校像に確実に近づいている、ということが示された取組であった。今後進めていく上での課題でもある評価委員の選出等についても、具体的な例を示していただいた。

3 審議事項

(1) 学校自己評価について

資料説明

平成19年度 学校経営の改革方針(例示)…参考資料1

平成19年度 学校経営の改革方針の評価表(例示)…参考資料2

平成20年度 学校経営の改革方針(例示)…参考資料3

平成20年度 自己評価報告書(A案)(B案)…資料2に基づき、中谷室長から報告

《以下意見交換》

【部会長】

自己評価表についてご意見をいただくのであるが、その前に評価表につながる学校経営の改革方針についてご意見、ご質問があれば、お願いします。

【委員】

大学では教育改革として、個々の先生の個々の授業について、17から20項目の授業アンケートを行っている。それを集計して学校としての評価としている。アンケートのみでなく、項目が5段階に評価され、それに基づいて各教員の各授業ごとの、自己評価、今年度の目標達成度、授業の改善工夫、気付いた点の4項目を学長に提出する。それを集計し公表している。教員としては辛い面もあるが、それは授業改善につながると考えている。評価表に数値があるが、ここを各先生の各授業の自己評価の積み上げ算にしていっての方が良いのではないか。数字をはっきりすると、より具体的なものになると思う。教科間のばらつきも少なくなり、学校の経営の改善につながると思う。

【事務局】

実際殆どの学校で積み上げでやっている。各教科ごとに自己評価をしているが、結果としては積み上げて平均で公表している。個々の積み上げの結果を、どこまで公表していいのかということは議論になると思うが、裏付けとしては積み上げている。

【委員】

県立高校はそうしているということか。

【事務局】

多くはそうであると思う。

【委員】

鼓ヶ浦中学校では違うということであったが。

【委員】

学校評価をある程度きちっとやっていくと、限界のところに達してくると思う。全体が底上げされるが、それ以上進めていこうとすると、教師個人の細かい積み上げをどう見ていくかというところに行かないと、ハードルは越えられない。

例えば視点生徒に、教師が授業中にどういう関わりを何回したかを中心に見ていくというような約束をしないと、視点生徒を置く意味がない。そういうことをやらずに大まかに捉えていると、学校自己評価に必ず限界が生じてくる。かといって積み上げをしっかりしていこうとすると、負担が大きくなる。その辺の折り合いをどうするかが、学校自己評価が成功するかしないかの鍵となる。

【部会長】

学校経営の改善を議論していくと、最後は授業の充実となる。そのためには生徒による授業評価は欠かせないが、年間を通してのアンケートはとるが、毎時間ごとの評価はしていない。その辺が課題だと思っている。評価表の様式についても、ご意見をお願いしたい。改善策を記述するように、様式を改善することになっている。

【委員】

これは公表される資料なので、保護者や地域の方が理解できるようにしないといけないということで考えると、情報は多い方が評価しやすい。公表して関係者の理解を深めるためには、情報が多という意味で、A案の方が理解を得やすいのではないかと思う。

【委員】

A案の方が良いと思う。自己評価する側の、なぜこのように判断したかの分析を明記した方が、次の「取組の課題」にも参考になると思う。

【部会長】

関係者評価につなげていく三重県型の自己評価表という視点で提示されているが、A案の方が情報も多いし、中身もよく理解できるという意見であった。

(2) アセスメント診断による組織や仕組みの状況の欄に、「左記の状況を判断した理由」があるが、これを例示するのであれば、もう一步踏み込んだインパクトのある理由になるよう、文言はもう少し工夫した方が良いと思う。

次回に再度提案いただくのであれば、お願いしたい。

(2) 学校関係者評価の進め方について

資料説明

学校評価の実施方法(3つの形態)…資料3

三重県立学校学校評議員取扱要綱…参考資料4

平成20年度学校評議員構成例…参考資料5に基づき、中谷室長から報告

【委員】

県としては近い将来学校関係者評価委員会を設置していく方向なのか。

【事務局】

今の段階では、学校自己評価の充実が先決だと思っている。三重県なりの経営品質を基盤とした学校自己評価の充実が最優先である。学校自己評価の充実のために、学校関係者評価の視点も必要であり、国の流れとしては何年後かには必置となると予想している。それに向けて学校関係者評価のあり方そのものを議論して欲しい。

【委員】

学校関係者評価に耐えうるような学校自己評価書を作っていこうとするならば、学校は保護者なり、学校評議員なり何かの場で、資料に基づいたプレゼンをして示しながら、意見をもらうことで進んでいくものであるという共通理解をした取組を、前段階としてしておくことが、学校の励みややり甲斐、地域の協力を得ることになり、ひいては学校を開くことにもなる。意見や評価をいただかなくても、公に晒されるものであるもので、外へ出した時本当に分かってもらえるように、元になる資料を示すぐらいの心構えがないと分かりにくい。

【委員】

自分は教育分野の人間ではないので、今日の会議の中でも用語や考え方で、分からないことがある。学校関係者評価委員も必ずしも専門家ではないので、難しいのではないかと思う。出された自己評価表を、そのまま受け入れて終わってしまうのではないか。その辺の手だてはどうか。

【事務局】

大事なものは「目指す学校像」なり「経営方針」の地域住民との共有だと思っている。目指す学校像」なり「本年度の行動計画」なりが、保護者や地域住民にも共有されているという前提がなければいけないと思う。学校の中で行った評価と、教員以外の目から見た関係者評価を参考にしながら改善活動につなげていくというのは、目指す学校像の実現に向けてのよりよい取組だと思う。共有のための仕組み作りが、学校経営品質の取組だと理解している。

【委員】

自分も高校で学校評議員やコミュニティスクール推進委員をしているが、教育の専門家ではない。自分以外の人も専門家ではないが、学校経営品質に基づいて個々の思いを出し合い、学校の方針が決まっていく。学校関係者評価や学校評議員というのは、専門家がいなくても、地域の独自の教育ができるのではないかと思う。

【委員】

そうだと思うが、それには手だてが必要ではないか。目指す学校像を地域の人と共有することからスタートするのなら、スタートするためにはそういうことがされなければならないと思う。それは学校経営品質の中で取り組まれているということか。

【委員】

それが具現化したものが、今度飯南高校で開催されるホームカミングデーではないかと思う。

【委員】

ホームカミングデーとはどのようなものか。

【委員】

卒業生だけでなく、地域住民の方に学校を開放し、飯南高校の中を知ってもらおうという取組である。

【部会長】

県立学校の場合、改革方針はPTA役員会や学校評議委員会で、校長が紙を配って説明するのは当たり前で、PTA総会でも出席した保護者に説明している学校がいくつかある。ホームページに載せているのは当たり前で、学校要覧にも載せている。

【委員】

用語が難しいので、整理したい。学校独自の自己評価とは、学校が校長をトップに職員と一丸となってやることで、学校関係者評価は、地域ぐるみで開かれた学校にしていくための試みということか。学校関係者評価は、教育関係者でなくても参加していただいた方に、いろいろな立場から話していただくというように理解して良いのか。

【部会長】

そうである。

【委員】

津市では、全ての幼稚園、学校で学校関係者評価を行うというように、学校管理規則を改正した。学校自己評価にこれまで取り組んできたが、公表されると細かすぎて分かりにくいということがあった。公表となると、地域の人や保護者の方が分からないといけない。説明をしたり意見をもらう場を意識することで、学校自己評価が精選される。関係者評価を実施することで、自己評価も分かりやすくなるだろうと考え、外部の評価を入れていくことにした。

今現場では学校関係者評価委員会を組織し、どう説明していくか、動き出している。また、学校関係者評価委員がどう学校に積極的に入っていくか、意識改革が必要だと考えている。ざっくばらんに学校をよく知っている人を人選し、どこを見てもらうか、どうコミュニケーションをとるかが大事だと思う。家庭訪問して個人に対して説明している校長もいる。委員を選ぶ時に充職が多くなると、会議の回数が多くなって不平が出るという問題もある。

津市としては学校評議員と学校評価委員会とコミュニティスクールの組織の3者の違いはどこにあるのか、今後整理が必要である。

【委員】

木曾岬町でも、学校管理規則を改正し、町として学校関係者評価をすると公表した。4月末にそれぞれの学校で関係者評価委員を選んでもらい、一堂に集めて研修会をした。その時評価の説明をすると同時に、学校長にプレゼンをしてもらった。学校関係者評価委員の中に大所高所から評価できる方は少ない。学校方針の共通理解がまず大事である。そのために情報を流す約束をしている。評価者のレベルが高くなければ、前に進めない。学校自己評価書の下にくる資料は、もう少し分かりやすく出していく工夫が必要である。

【部会長】

東海4県の校長会でも、岐阜と静岡は県レベルで管理規則を変えて関係者評価をするということだった。具体的にどう取り組むか、こういう場で協議している県は多くない。県全体としてどう取り組むか、さらに整理しながら継続して次回審議したいと思う。

(3)今後のスケジュールについて

平成20年度会議スケジュール・・・資料4に基づき、中谷室長から報告

【部会長】

次回は自己評価報告書の案を再度提案を願います。関係者評価に関わる課題を整理しながら、それをどうクリアしていくのか議論の継続をしていく。また、その延長線上として第三者評価に関わっても、審議をしてみる必要があるのかと思っている。

(4) その他

なし

4 連絡事項

次回会議は、8月11日（月）午前を予定している。改めて時間・場所等設定し、連絡させていただく。

【鎌田副教育長】

この部会だけ2年にわたっての審議となり、会議数も多くお世話をお掛けしますが、県内の学校を良くしていただくという観点から、ご協力をお願いしたいと思います。

6月から9月まで、県庁はクールビズということでノーネクタイの方向になっていますので、暑さ対策できる服装でおいでいただけたらと思いますので、よろしくお願いします

以 上